

## 拡大するエッシャーの森

エッシャー風の連続パターンに挑戦する作家

坂根 巖夫

エッシャーのいまー

ひとこのエッシャー・ブームが、もう遠い日の思い出のように懐かしい。いまはあのころのように、エッシャーの作品の前に立ち止まって、物珍しそうに見つめている人の姿など、あまり見かけることもなくなりました。しかし、だからといってエッシャーのあの強烈なイメージの世界が、風化し、消えてしまったかということ、決してそんなことはない。いやむしろ、いまでは多くの人々の意識のなかに、一種の心象風景のように刷り込まれ、ときに応じて泉のように蘇ってきては、再び人々に新鮮なアイデアをかきたて、元気づけてくれる貴重な存在になっていることに、あらためて気づかされるのである。

いやいや、これは私たちのような年配者の感慨にすぎない。一方では、毎年生まれ育ってくることもたちにとって、エッシャーは常に新鮮で、知的な遊びの対象として生きつづけている。いまでも何年ぶりかで、思い出したように世界のどこかで、大がかりなエッシャー展が復活して、その度にやはり往年のブームを彷彿とさせる人の列が並び、そこからやはり無数の若いエッシャー・ファンが次々に生まれて来ているのである。

私の手元には、毎年のようにコネチカットのマイケル・サックスから、エッシャーのカレンダーやデスク・ダイアリーなどが届く。エッシャーの膨大なコレクターである彼の営業活動の一つだが、その出版活動がもう十数年以上続いていること自体が、世界のエッシャー・ファンの健在さを証明しているように思えてならない。

ことしは、エッシャーが生まれてから 100 年目。それを記念して世界中でいくつかの行事も計画されている。1985 年にローマで開かれたエッシャー会議に続く 2 回目の国際会議をこの 5 月に開くから出席しないかというメールが、20 数年来の旧友の数学者ドリス・シャットシュナイダーや、ローマ大学教授で数学と芸術の映画を作ってきたミケーレ・エンメルたちから届いている。エッシャーの甥でオランダの日蘭協会の仕事をしている旧友のアーノルド・エッシャーからも、何か新しいイベントを計画中という手紙が届いた。そんないきさつのなかで、私自身、久しぶりに、遠い日のエッシャーやエッシャーの家族たちとの出会いの回想に浸っていた矢先であった。

ある日突然、一人の若いグラフィック・アーティストから一包みの荷物が届いた。それが、藤田伸さんという人からの「連続模様の不思議」という本著の原稿だった。ばらばらとページをくると、それはエッシャーの作品のなかでも最も種類の多い、テセレーション（繰り返し模様）による絵をちりばめた画集的な解説本であった。ああまた一人のエッシャー風作家が生まれたのか…と、読みだしてみたら、意外なことに、ここには一枚もエッシャー自身の作品が使われていない。著作権を意識したこともあるようだが、その作品の描き方の解説も、いまま

でのエッシャー自身のとはかなり様子が違っている。読み進むにつれて、この作家自身がエッシャーの繰り返し模様の作品の魅力にとらえられ、エッシャーと同様に、その描画法を工夫しようと試行錯誤の発見の旅にのめり込み、そのあげくに、とうとうエッシャーとはまた一味違った新しい描画法を生み出した一人であることがわかってきた。

じつは世界中には、エッシャーの多彩な作品に触発されて、それぞれに個性的な作品を生み出した人はいままでに無数にいる。エッシャーの不可能の作品シリーズから、宇宙的なイメージ、さらに繰り返し模様（テセレーション）をテーマにした絵画やデザイン、映画、コンピューター・グラフィックスの作品など、その例は非常に多い。いやアーティストばかりではない。科学者から数学者、メディア作家まで、ときにエッシャーのスタイルで、ときにエッシャーのシステムの分析や解析までをテーマにして、独特な作品を生み出し、それらがまるでエッシャーという木の幹から枝分かれして成長した巨大な樹木や、その回りに落ちた種から育った樹木が林立する森のように、繁ってきているといってもいい。そのなかで、藤田さんのこの本は、たとえていえばその巨木の枝の一本であって、さらにそこから幾つもの小枝が分かれて成長できる可能性にも満ちている。藤田さん自身が、エッシャー的な連続模様の不思議に惹かれて、何年間も試行錯誤で、その体系的でより単純な描き方を求めてさまよい歩いた末に、エッシャーとはまた違った独自の描き方を発見し、それを素人にもわかりやすい言葉と、図式で描きだした解説書でもあったのである。

エッシャー自身、その著書のなかでは繰り返して、この幾何学的な連続模様の描き方をめぐって、いかに孤独な旅を続けたかを告白している。どうして、他の芸術家たちがこの道を辿って、見えないすばらしい花園に踏み分けて来てくれないかと、何度も不満を漏らしている。数学者たちもまた、その連続模様の基本的な構造の数学的分類だけを発見してしまうと、具体的なそのイメージの制作にはほとんど興味を持たないで去っていくということに、エッシャーは不満だったようである。

その困難な作業に、藤田さん自身、ときにはエッシャーの足跡をたどり、ときにはまったく別の道をさまよいつつながら、いままでエッシャーも触れていなかった一つの新しい手法にたどり着いたという。この手法のことを、藤田さん自身はマッチング・ルールと呼んでいる。ひとことという、これは連続模様を生み出す単位であるタイルの形を、同じ形を保ちながら、どう連続性につなげていくかという問題をなるべく単純化する発想法から生まれたものであった。エッシャー自身も、そんな手法をいくつか提案しているが、藤田さんは、単位の形を構成する曲線を単純化して、一本の曲線から出発し、まず、その線の回転と裏返しから得られる4種類の線を組み合わせることで、意味ある形を見つけやすくする方法を編み出した。さらにそうやってできたタイルの形でうまく隙間なく平面を埋めつくせるかどうかをなるべく簡単に探し出すために、マッチング・ルールという法則を考え出したのである。その単位となるタイルの形も4角形だけには限らない。まず4角形を基本とするタイルから出発して、5角形、6角形と進めていくという方法で展開してきた。もちろん、こんな風に、ルールに形態を合わせるという方法からだけでは、そこから出てきた形

が必ずしも美意識を満足させるとは限らない。知的な法則性による形態誕生の秘密と、感性による補正の接点のところで、最終的な作品の表現が決まるからである。いわば、ここでも科学的な知性と芸術的な感性のせめぎあいとの間で最終的な調和が生まれることになる。これはすべてのメディアを使った芸術作品に通じることだが、藤田さんは、そのプロセスのなかでも、できるだけ多くの人々がアクセスしやすい技法を導入しようとしたのである。

藤田さんは、それだけに終わらず、従来のテキスタイルで使われる図柄のデザインにも応用できる連続模様の作り方にも挑戦し、この本の後半では、こうした実用的な応用の可能性にまで触れている。

この後半のパターンの繰り返し、彼自身のいうリピートというパターンの作り方の展開にあたっては、最近のコンピューター・グラフィックスの応用技術として知られるモーフィング（変容）の手法が使われているのが、興味をそそった。一つのかたちから別のかたちへと途中を少しずつ変容させながら次第に近づけていく手法は、一般的にはイン・ビツウイーンとかモーフィングと称されているが、藤田さんはこれを、彼独自の呼び名でブレンドと呼び、そのブレンドの手法の展開法についても触れていく。純粹に作品の制作だけに集中するだけでなく、むしろその手法を人々が使いこなして、身近なテキスタイルやさまざまなデザインに展開できるツールを提供しようとしている姿勢は、いかにもデザインの社会性を心得た作家の心意気として映るのである。

いまのこともたちにとっては、この本は憧れのエッシャーの作品を掌中のものにして、思い思いのイメージ

を連続模様にも展開するためのツール・ソフトであり、仲間たちとの新しい交流の輪を触発してくれる描画作戦のマニュアルにもなるだろう。あるいは、新しいテキスタイルの模様を試行錯誤しているデザイン学生にとっても、作図の場合の貴重な発想のヒントを与えてくれるに違いない。

エッシャーの作風が人々の心に宿した新しい創造の芽が、こんな風にさらに新しい小枝を延ばし、さらに成長して、次第に世界中の大きな森にまで広がっている現代の風景を前にして、もしいまは亡きエッシャー自身がこのことを知ったなら、どんな感慨を懐くだろう、と思わずにはいられない。生前、必ずしも自分の作品が理解されないことで、孤独を感じながら逝った人だけに、それは彼への鎮魂の歌のように響くに違いない。

私自身、長年のエッシャー・ファンの一人として、これは奇しくも生誕100年記念の、エッシャーの霊の前に捧げたい本の一つともなったのである。

(1998.2.8. 坂根 徹夫)

